

## 書 評

### 南亮三郎著『世界人口と発展途上国』

千倉書房、東京、1973、289ページ

1. 本書は南亮三郎博士の人口学体系の第7巻にあたる。同博士の雄大な人口学研究計画の最終巻である。1960年の体系Ⅰの『人口学総論』から始まって、1963年体系Ⅱ『人口思想史』、1964年体系Ⅲ『人口理論』、1966年体系Ⅳ『マルサス評伝』、1969年体系Ⅴ『人口政策』、1973年体系Ⅵ『日本人口と経済』、そして最後に体系Ⅶ『世界人口と発展途上国』が同じく1973年に刊行された。同博士の人口に関する刊行書はこの体系以外にも多数ある。たとえば、本体系と関係深いものとして1954年の『人口論』（三和書房、344 pp.）がある。

2. このような同博士のまことに壮大ともいふべきこの体系の中で、この近著はどのような位置を占めているのであろうか。私には次のように思われる。それは思想史（体系Ⅱ）、理論（体系Ⅲ）、政策（体系Ⅴ）をはさんで、始めに人口学総論（体系Ⅰ）があり、終りに本著『世界人口と発展途上国』（体系Ⅶ）があるという構成的意義である。第1は、人口学体系の理論的検討ならびに構想から出発し、思想、理論、政策の実体的研究を経て、そのすべての成果が本著において結集しているという意味である。第2は、同博士の長年にわたる歴史的、理論的研究を土台とする世界の地域的、実証的研究という極めてユニークな意義をもっているということである。

3. 本書は前編と後編に分かれているが、前編では世界あるいは普遍性の観点から、そして地域的には特に低開発国に焦点をあわせてその所論を展開されている。後編は、もっぱら「アジア低開発国」がとりあつかわれているが、この編の特徴は主として同博士が現地をつぶさに見聞された貴重な経験が基礎となっていることである。台湾、インド、パキスタン、インドネシア、フィリピンが対象となっている。

4. 本書において貫かれている同博士の注目すべき見解は、発展途上国における人口転換に関するものである。それは人口現象に対する同博士の基本的理解から出発している。“人口現象の推移は経済の発達過程と似ている。それぞれの地域に、それぞれの特殊事情に応じた変容はありえても、基本的な発達過程は変わらない。それと同じように、人口現象もまた地域によって偏差はありながら、基本的な経過はあい似たものであろう。……一言にしてそれは人口現象の普遍性、ないし国際性といえるであろう。”（pp. 1~2）。“発展途上国は独自の法則に従うという主張はあたらない。むしろ発展途上の国々や地域には独自性というものはあるであろうし、それを明確にえぐり出すという努力も必要であるが、基本的な発展軌道は見誤られてはならない。”（p. 2）。また、人口転換理論の低開発国への適用の可能性に関連して同博士は次のようにのべられている。“ヨーロッパ先進国のかつてのパターンがそのまま今日の低開発国に妥当するとは思えない。……しかし同時に私は、経済発展のコースが今日の低開発国で全く変わっているとは思わない。低開発国もまた<農業段階>から<工業段階>へと進む方向をとっている。経済発展のコースがこのように同じであるとすれば、これと対応すべき人口過程の方向も……究極的には趣を一つにすると云わざるを得ない。”（p. 20）。以上は今日の人口の分野における最大の理論的、实际的課題に関するもので、同博士の見解は特に注目されねばならない。

5. 最後の章はミュルダールの2, 284ページに及ぶほう大な著書『アジアのドラマ』を精読されたコメントである。歴史的考証のみならず、現段階の問題意識と創意の卓抜さにおいて、日本のトイバーともいわれるべき南博士の人口学的研究は、この7巻の人口学的体系の完了で終わっているとは思われない。事実、新次元での研究を開始されているもよう期待される所多大なものがある。

（黒田 俊夫）